

# 「徳山雑吟」

— 解説と翻刻 —

渡 辺 憲 司

〔解説〕

宝永七年刊「徳山雑吟」は、長州徳山藩三代藩主毛利元次と、その周辺の人物の漢詩文、和歌、俳諧、連歌などを集めたものである。

元次は、幼名永井亀之助、後に主計、諱は初め賢富（或は賢光）、襲封後、元次と称した。字は善長。徳山、徳山愚人などと号した。

出生は、「寛政重修諸家譜」を始めとして、公儀に届け出のものには、寛文十一年とあり、「内閣文庫蔵内閣文庫大名家の著述目録」（昭53・国立公文書館編）などの解説においても、そのまま踏襲されてきた。

しかし、徳山市立図書館蔵「徳山略記」前編・卷之三に、

寛文十一年辛亥、於京都御誕生天保七年丁未十一月八日御誕生候へ共、元次公御文字ニ被為成候、右之通ニ被為成候

とある。同館所蔵「徳山毛利家譜」にも、同様の注記がある。元禄三年、二代藩主元賢（初代就隆の五男）が早世したため、就隆の三男で妾腹（元次の母は銀、京都紺屋の娘と言う）の故に二代を襲封出来なかった元次が、急遽、元賢の養子という形をとって幕府に届け出されたのである。寛文七年十一月の出生である。

「徳山雑吟」— 解説と翻刻 —

元禄三年、元次と名を改め、従五位下飛騨守に任官して、徳山藩を襲封した。その後、諸法度の整備、新田開発などの治績をあげたが、正徳五年、萩の本藩と争いを起し（万役山事件）、正徳六年、幕府の命によって改易となり、元次は出羽新庄藩に配流された。しかし享保四年、家臣等の活躍によって、徳山藩は再興され、元次も罪を許されて、江戸に帰ったが、同年十一月十九日に病没した。享年五十三歳、法名、曹源院性海滴水居士。

元次が、殊更に、文芸に関心を寄せた大名であったことは、水戸光圀の後継者たると贊辞した、過賞とも思える林義端の「西山源公之後、繼其芳躅舎侯、而其誰哉」（「徳山雑吟」後跋）といった一文などによってうかがうことが出来る。

元次は、「徳山雑吟」を始めとして、多くの書物の編纂に関与している。「梯鳴藁詩歌」（元禄十五年成、徳山市立図書館蔵）、「花玉集」（宝永元年成、水津光端著、徳山市立図書館蔵）、「徳山君詩稿」（宝永元年成、所在不明）、「徳山名勝」（宝永三年四月刊）、「塩鉄論」（宝永五年十二月刊）、「熱海地志」（正徳四年成、宮内庁書陵部蔵）などである。

元次の文芸への関心が多方面に及んでいたことは、「徳山雜吟」の内容の不示所であるが、連歌においては、宝永二年の「連歌衆名帳」（山口文書館蔵）にその名があり、元次発句の元禄十年十二月十八日奉納の夢想連歌が山口の多賀神社に存し、元禄十三年三月朔日奉納の夢想連歌が東京の湯島天満宮に存する。しかし、元次がもつともよくしたのは漢詩であり、当時の代表的な詩を集めたという、「博桑名賢詩集」（宝永元年五月刊）には、「士峰」と題した詩が載っている。また、大名六十五家の詩選集「熙朝詩薈」（弘化四年成、内閣文庫蔵）にも、一首載っている。

また、元次は蔵書家として知られている。自らの燕居の所を棲息堂と名づけて、そこに多くの書籍を集めた。宇都宮趣庵の「棲息堂記」に「建書庫蔵経史子集若干編」とある。それらの一部は、正徳五年、徳山藩改易の際に萩の本藩（後に明倫館所蔵）のものとなり、更に明治二十九年に当時の宮内省に献納され、そして残部は昭和三十一年に山口大学付属図書館及び徳山市立図書館に寄贈されている（一部、毛利就孝氏所蔵）。逐次増加したものを含み、元次時代に集書した全貌を明らかにすることは困難であるが、「御書物目録」（宝永五年成、徳山市立図書館蔵）、「倭板書籍考」（宝暦十一年成、宮内庁書陵部蔵）、「唐板書籍考」（同上）、「蔵書簿」（江戸時代末期成、山口大学付属図書館蔵）、「徳山棲息堂蔵書目録」（山田実成、明治29）、「毛利元次公所蔵漢籍書目」（徳山市立図書館双書第十二集、昭和40）などによってその概略を知ることが出来る。それらの紹介は他の機会に譲るが、質量共に充実したものである。「金瓶梅詞話」の最善本が、日光輪王寺慈眼堂本、及び北京図書館本と

共に棲息堂文庫本であることは一つの証左となるであろう。（「だ  
いあん」90号参照・昭38）

「徳山雜吟」によって、元次と文芸面で交遊のあった人物の多くを知り得るが、それらはおおよそ古義堂門の人物と徳山藩関係に分けることが出来る。

序文を記した中島義方（浮山）は、古義堂門中、講説に最も力があった人物とされている。「古学先生伊藤君碕銘」を記した北村可昌、晩唐の宗匠と言われた鳥山芝軒（輔寛）、仁斎と宮廷学との交流に影響を与えた伏原宣通、東宮学士であった藤原（勘解由小路）韶光などの名がある。

後跋を記し、版元であった林九兵衛義端（文会堂、九成）は、元次が関与した「徳山名勝」、「塩鉄論」、そしてさらに、前述の「博桑名賢詩集」の書肆である。浅井了意の「狗張子」などの序文も書き、当時の出版界に大きな力があった人物であり、古義堂門の高弟である。

最も所収詩文の多い伊藤長胤（東涯）との関係は、本書以外に「徳山名勝」の序文、「題毛利侯所蔵画軒」、「防州徳山鎮熊野新宮華表銘」（「紹述先生文集」）などによって知ることが出来る。異母弟長英（梅宇）と共に親密な関係にあった。

伊藤梅宇の徳山藩出仕については、岩波文庫の「見聞談叢」の解説（亀井伸明著）に、正徳五年に筮仕し、「翌六年二月には帰っているから、その学問的な意味は東条琴台の説く如く重視しすぎてはならぬと考える」と記されている。しかし、「徳山路記」の宝永四年六月の条に

京都儒者伊藤源藏弟同重蔵<sup>五</sup>、五人扶持被下置、後年学文弥相助、御用被召仕候節、御了簡可被成旨仰渡候。

とある。更に、本書の宝永五年三月の東涯の記述(『書三塩鉄論後二』に「願眷及<sup>子</sup>虞<sup>弟</sup>業<sup>肆</sup>」)とあり、同年春の林義端の記述(『敬題河坊二』)によっても、元次と東涯、梅宇の關係を知り得る。元次が「吾嘉<sup>仁</sup>齋<sup>之</sup>志<sup>嘱</sup>嫡<sup>息</sup>長胤<sup>二</sup>」(『新刊塩鉄論序』)と、東涯に点校させ、「塩鉄論」を刊行したのは宝永四年秋である。その關係は約十年、梅宇と徳山藩の關係は、あながち輕視すべきものではない。猶、正徳六年の致仕は、同年徳山藩改易のためと思われる。

徳山藩儒医、長沼玄珍は、初名道安、後に常庵と称した。元禄十二年八月馬廻格医(十人扶持)で出仕、同十五年京へ遊学、元次の命を受けて、宇都宮遯庵、伊藤仁齋等と交遊關係を持った。宝永二年十二月「徳山府記」を撰ぶ。享保十五年八月廿一日没。

水津左太夫光端は里村昌億門、禄百石、前述の元禄十年十二月、多賀神社奉納の連歌にその名がある。編著として「花玉集」(宝永元年成、徳山市立図書館蔵)、「独吟連歌千句」(宝永二年成、同蔵)がある。「徳山名士墳墓掃苔録」(兼崎茂樹著、大正8)には、「正徳三年正月廿四日入牢後遠島」とあるが未詳。長沼玄珍と共に当時徳山藩文芸の中心人物。

岩国藩儒、宇都宮由的(遯庵)は本書には一編のみ所収であるが(これは宝永四年に没しているためである)、元次と親密な關係にあった。元次の依頼に応じて、「梯鳴藁詩歌」の序文(元禄十四年成)、「棲息堂記」(元禄十六年成)、「松屋十八景記」(同年成)などの文を撰び、また「遯庵詩集」には「徳山君恩顧之辱」と題した

詩の他、和韻の詩など十数首がある。「徳山君詩稿跋」によれば、元次の詩に朱点し加評している。二人の交遊は遯庵の京都在任中からであるが、岩国帰参の後、元禄十六年九月、宝永二年十月の二度徳山を訪れていることが、岩国藩の「御用所日記」(岩国徳古館蔵)の記述によって知り得る。

本書の「命<sup>梁</sup>塵<sup>号</sup>二説」に記された天満屋九兵衛は「徳山略記」卷之三、宝永四年六月の条に

大坂浄瑠璃語リ天満屋九兵衛定式人扶持下之、徳山被召下候節  
八三人扶持増被下之。

とある。古浄瑠璃系の太夫であろうか(未詳)。

最後に「徳山雑吟」所収外で、元次と交遊のあった人物について付記しておく。

谷口重以は、立圃門、後季吟に属し、さらに宗因風に転じた俳人であるが、古義堂門で徳山藩御用の京の呉服屋(「伊藤仁齋の門人帳(下)」植谷元、「ピブリア」71号)で、元禄十五年二月に「梯鳴藁詩歌」の仮名の序文(漢文は宇都宮遯庵)の執筆を梅月堂宣阿にすすめている。雲英末雄氏の谷口重以年譜(『貞門談林諸家句集』昭46・笠間書店)は元禄四年までの重以の動静を記す。宣阿は歌人として知られるが、「陰徳太平記」(正徳二年刊)に補遺・潤色を加えた人物で、岩国吉川家の老臣香川正矩の次男景繼(法名堯真、法号宣阿)である。書家として、また朝鮮來聘使との応酬で知られる佐々木玄龍は、「徳山名勝」の版下を書き、徳山市立図書館には数種の自筆の軸物がある。また「文翰雜編」の編者として知られる山本通春は「紀伊侯のちに徳山藩に聘せられた」(『近世初期文壇の

研究」小高敏郎著、昭39・明治書院」とされているが未詳である。

以上のごとく、毛利元次の文芸面の交遊（毛利元次文化圏）はかなり多彩である。大名、公卿、僧侶、武士、町人といった階層の広がりや、儒者、歌人、俳人、浄瑠璃語りといった幅広い交遊を見ることが出来る。構成員のみならず、その内容も漢詩文、和歌、俳諧と種々雑多である。また「戊子道中」や「覽海軒詩并連歌」などからは、大名を中心とした詩歌の応酬の様相をうかがうことが出来る。

そして「戲詠俳優兒并序」などの戯文を所収する一方、その直前には、経済史的にも意義あると思われる「塩鉄論」刊行の次第を述べる文をあげる。「塩鉄論」は治者側の法家的思想に基づく塩鉄の専売的政策と、それに反発する文学、賢良達の儒家思想の問答体の論争である。また郭沫若によれば、戯劇文学へと発展するものである（「塩鉄論読本」一九五七・科学出版社）と、されている。毛利元次は日本で最初に「塩鉄論」を刊行させた人物としても評価される（東洋文庫「塩鉄論」昭45・平凡社）。元次は序文に「夫塩鉄之利所以佐三百姓之急、而此書亦詳述所以拯三百姓之急之術。挙而措之則何職不修哉」と記しているが、宝永年間、徳山藩は未曾有の凶作と大火に相対し、領内困窮の時であったことも、本書理解の背景として付記しておく。

「徳山雜吟」を、構成員及び内容の△雑吟▽の故に、所謂、雑書として看過することも、また大名の暇餘の出版と見なすことも安易に思える。一大名の個性をうかがう上でも、大名文化圏の検討においても意義あるもののように思える。更に本書が徳山藩という三万石余の小藩（支藩）に立脚したものであることを考え併せる時、

△地方文芸▽解明への一視点を提供しうる資料のようにも思える。猶、毛利元次の年譜及び交遊のあった人物については、別稿（「江戸時代文学誌」第二号、柳門舎、掲載予定）を用意している。

#### 〔書誌〕

底本、宮内庁書陵部蔵（徳山毛利家本）。

原表紙（縦二十七種、横十八種・原題簽（左肩に「徳山雜吟」・内題、「徳山雜吟」・匡郭、四周単辺・一冊本・全丁数五十二丁（序文、目録十丁、本文三十九丁、跋文三丁）・刊記、「宝永庚寅新刊徳山雜吟 京師書林文会堂繙梓」・行数、序文四行、本文八行、跋文六行・明治二十九年、徳山藩より宮内省に献納の一本である。

#### 〔凡例〕

一、翻刻は底本の形を再現することを旨とした。但し、読解の便をはかり、また印刷上の都合により、次の諸点は校訂者において底本を改めた。

一、目録、及び「蝸牛花瓶記」の次にある「蝸牛花瓶図」を省いた。

一、底本には、漢文に送り仮名、一部に振り仮名があるが、これらを省き、校訂者において句読点をつけ、漢詩の区切りは一マスあけた。

一、底本の行移りは従わなかった。

一、変体仮名、合字の類は通行の文字に改めた。

一、漢字の旧字体、略字、異体字、俗字などは、おおむね新字体、通行の字体に改めた。

一、尊貴の呼称に対する表敬の字あきはすべてつめた。

德山雜吟序

心之所存不同、情之所好亦異。故人各有好、有不<sub>レ</sub>好。夫徇<sub>レ</sub>徯乎詩壇、優<sub>レ</sub>游乎文園、務欲<sub>レ</sub>抽<sub>レ</sub>思、刻<sub>レ</sub>意以驚<sub>レ</sub>一時、是人之所以好而非<sub>レ</sub>余之所好也。無<sub>レ</sub>求<sub>レ</sub>于世、無<sub>レ</sub>謀<sub>レ</sub>于身、唯研<sub>レ</sub>窮理義、以教<sub>レ</sub>導後進、是余之所好而非<sub>レ</sub>人之所好也。洛書坊林義端輯<sub>レ</sub>德山侯（侯姓大江、名出次、字雜詠并諸次韻、又附時賢、命之瓊藻、以為二卷、名曰德山雜吟、將<sub>レ</sub>壽<sub>レ</sub>之梓、請<sub>レ</sub>余題其首。閱<sub>レ</sub>其諸作、悉是清澹閑肆、可愛<sub>レ</sub>頌、固不<sub>レ</sub>待<sub>レ</sub>余言、以為<sub>レ</sub>輕重焉。況弄<sub>レ</sub>筆墨、以評<sub>レ</sub>駁人之詞章、亦非<sub>レ</sub>余之所好乎。而今不<sub>レ</sub>辭<sub>レ</sub>其請者、今之語侯、不<sub>レ</sub>遜<sub>レ</sub>声色、不<sub>レ</sub>殖<sub>レ</sub>貨利、舍<sub>レ</sub>己從<sub>レ</sub>人、審<sub>レ</sub>思斯文<sub>レ</sub>者、惟德山侯其人也。夫梁<sub>レ</sub>道<sub>レ</sub>人之善、以播<sub>レ</sub>揚諸四方者、亦余之所好也。於是乎書。

寶永六年己丑至日

洛陽中島（秀方）序

德山雜吟目錄（略）

德山雜吟

○戊子道中

德山愚人次

長途命<sub>レ</sub>駕馬斯韉 述職東江茲有<sub>レ</sub>年 流淺風光綴<sub>レ</sub>綠水 雲開日影媚<sub>レ</sub>青天 蜀茶止<sub>レ</sub>渴烹<sub>レ</sub>村店 魯酒欲<sub>レ</sub>醺貼<sub>レ</sub>市塵 行隊後前齊戴<sub>レ</sub>笠 祖神默禱共安全

○奉和<sub>レ</sub>德山毛利侯（元次）觀宗道中高韻

伊藤長胤

士峰查路三千 藩服觀宗方是年 怒馬鮮衣傍<sub>レ</sub>碧海 高牙大纛接<sub>レ</sub>蒼天 穿<sub>レ</sub>波燈火亮<sub>レ</sub>魚艇 臨<sub>レ</sub>岸招牌沽<sub>レ</sub>酒塵 看<sub>レ</sub>尺須磨磨石勝 一篇珠玉感<sub>レ</sub>情全

○寶永戊子季春、德山毛利君朝<sub>レ</sub>觀江都。途中有詩、代<sub>レ</sub>林九成、次<sub>レ</sub>韻奉<sub>レ</sub>呈。伏祈<sub>レ</sub>笑覽。

鳥山輔寬

「德山雜吟」一解説と翻刻一

錦纜牙櫓迎<sub>レ</sub>日鮮 掃期預說在<sub>レ</sub>明年 桃花浪暖重<sub>レ</sub>三節 柳絮風酣百五天 野寺鐘殘朝<sub>レ</sub>上馬 山城鼓斷晚<sub>レ</sub>投<sub>レ</sub>塵 觀宗千里志何勉 応見君侯忠義全

伊藤長胤

○戊子三月五日、自伏見<sub>レ</sub>易<sub>レ</sub>舟到<sub>レ</sub>大坂。 一棹沿<sub>レ</sub>流穿<sub>レ</sub>彩霞 渡頭人聒日<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>斜 幾多人物幾多地 又有<sub>レ</sub>小舟來<sub>レ</sub>亮<sub>レ</sub>茶

同

○六日平明、到<sub>レ</sub>大坂埠頭。

百里長隄 葉舟 櫓声和<sub>レ</sub>夢下<sub>レ</sub>清流 忽從<sub>レ</sub>天滿橋<sub>レ</sub>邊<sub>レ</sub>過 行客解<sub>レ</sub>裝上<sub>レ</sub>埠頭

裝上埠頭

○德山面筋記（住吉丸）

同

古者君子之居<sub>レ</sub>身也、其耳目之所接、心意之所<sub>レ</sub>注、不<sub>レ</sub>唯其對<sub>レ</sub>簡編、親<sub>レ</sub>聖賢之可<sub>レ</sub>以養<sub>レ</sub>德、而至於宮室園囿之奉服玩器皿之御、莫<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>各因<sub>レ</sub>其用、以寓<sub>レ</sub>取<sub>レ</sub>義之戒<sub>レ</sub>矣。蓋視以為<sub>レ</sub>規、則正而易<sub>レ</sub>忽、習以為<sub>レ</sub>常、則安而有<sub>レ</sub>養。寓<sub>レ</sub>規戒于燕安之地、收<sub>レ</sub>聖功于逸豫之場、盤<sub>レ</sub>玉器杖各有<sub>レ</sub>銘戒。古人良有<sub>レ</sub>深意焉。寶永戊子之春、德山毛利侯、東觀之次<sub>レ</sub>謁<sub>レ</sub>大坂、引<sub>レ</sub>周<sub>レ</sub>觀面筋。材偉而用宏。彩檻繡帷、華而不侈、榜曰<sub>レ</sub>住吉丸。常置<sub>レ</sub>之大坂、侯觀宗就國之時乘焉。棹歌以入<sub>レ</sub>港。仍命<sub>レ</sub>予記之。侯平日好文講<sub>レ</sub>學、於<sub>レ</sub>園亭之勝林泉之趣、每必託<sub>レ</sub>之于詞。而亦必於<sub>レ</sub>一筋<sub>レ</sub>求<sub>レ</sub>題者、其意豈徒乎哉。今夫舟之為<sub>レ</sub>物也、材偉則能牢而不折、用宏則能容而有<sub>レ</sub>餘。可以載<sub>レ</sub>衆物而安、可以衝<sub>レ</sub>風濤而順、可以通<sub>レ</sub>往來而便。不然者、反是。侯其自取<sub>レ</sub>其義<sub>レ</sub>而身<sub>レ</sub>之也。是為<sub>レ</sub>記。時寶永五年戊子秋七月日。

○棲息堂座右箴

同

棲息堂、德山毛利侯誦書之室也。侯平素好<sub>レ</sub>學耽<sub>レ</sub>書。頃者命<sub>レ</sub>予次<sub>レ</sub>第

董遇譙周等語及温公君子德勝才等論、以述三座右箴。因徵三辛甲  
虞箴體、代言書箴之。

修身之要 非道曷得 古今之變 非學曷識 述之者聖 載之者  
經 三餘業足 百遍義明 譙周独笑 子產四時 古之君子 孳屹如  
斯 譬如累土 以成三層台 爰審其德 而勝其才 維侯好  
文 克務其德 燕居說書 堂曰三棲息 斯焉農夕 經史鼓吹  
文学司籍 散告三執事

宝永五年戊子重陽日

○書三塩鉄論後

同

孟子有言云、今有受一人之牛羊、而為之牧之者、則必為之求三牧  
与、芻矣。今夫分三符竹、昨三茅土、一方之生靈仰三其呼吸矣。其為牛  
羊二也大矣。若夫草三晉民命、而不三存三勤恤之意、則不三幾三於不三求三  
牧与、芻乎哉。欲三求三牧与、芻、則何在。聖謨賢範明若三日星、不三待  
弁三之于念慮幾微之頃、不三勞三飯三之于智術機變之間。使三民仰事俯  
畜以保其生、乃所三以事三上治三國之要也。而誦三古者、常以藉三口。而  
經三世者、以為三迂。塩鉄論所載是也。德山毛利侯元次生乎闕闕之家、  
素好三学仁慈愛三士。夙耽三經籍、燕居之室曰三棲息堂。閱三于其側、遍  
藏三古今圖書。且慕三先人之道、願眷及三子廩三弟長英三肄業。其府之士、  
及三先人之門三者多矣。頃聞三先父称三斯書、捐資刊行、命三乎点校、且  
徵三之序。侯之所三志至矣。始不三虛分三憂之寄三乎。是序。宝永戊子三  
月日。

○大坂府中作

伊藤長英

輕舟短棹水茫茫 滿目風光客路長 夾岸村家煙樹裏 憑人借問是  
何鄉

○敬題三河舫 号三住吉丸

林義端

宝永戊子之春、德山侯將三朝三東都。暫止三太坂、命使三東涯子兄弟  
周三觀河舫。侯之至賤亦許三相隨焉。謹賦三小律、奉三謝恩願之万  
乙、云。

春港繫三船楊柳邊 繡帷錦纜映三流鮮 狂奴縱三目窗下 疑是登仙遊三  
九天

○重題三河舫

同

己丑孟夏、長沼丈從三德山侯之婦任、來三于伏見。僕冒三曉衝三雨、往  
而迎三之。途過三京橋、見三三樓船、以三雨衣三覆三之。問三傍人三則云、  
住吉丸、有三感三于懷、重賦。

滿川風雨欲三迷三津 忽見三龍頭三客意新 因憶去年恩命日 瓊樓朱檻  
寄三吟身

○遊三鳴立菴

德山愚人次

板橋爰渡向三西行 東往舍邊陳跡名 鳴立沢之秋夕暮 口頭歌詠問三  
僧證

右詩中板橋東往舍鳴立沢者、相州鳴立菴二十四景之内也。起句之西  
行者、菴中安置此象。

○春興

同

等閒雁雁後 托三興繁多情 朝雉春山雉 晚歌村陽鶯 紅桃花似醉  
青柳葉敷三榮 独坐融融日 含三毫吟嘯声

○庭即事

同

風流嘉樹御前庭 揺三尾遊行孤鶴鶴 仁者有三山深智水 石間処置  
万年青

○寄三炊軒書

同

陳啓、千里間闊之地。瞻企、香納舉止安健。隨意就審欣喜。拙子無憂、在東都而勤行惜過陰。前年於防州之食封、所約之花王三種。第一之江川海濱百里五十三駅、莫滯遲到武陵來。慶幸慶幸、倏忽移植狂園、如教如法培養。花時節向他人誇焉。蠢躍多慰、聊修寸楮、鳴謝何以報之。吝嗇惟時繁霜、強餐自愛。世事難冗、不能纏纒。万万融昭。宝永五初冬。

○花玉集後序

同

蓋漢唐之詩、對吾邦之歌矣。連句者、偶吾邦之連歌者乎。歌永言、連歌者言簡而意足。不但叙一時之景興。可謂演德、物細無不謂、鴻碩無不謂。其旨幽邃矣。說苑曰、土積成山則豫樟生焉、學積成聖。羅錦山氏曰、一日一錢、千日千錢。或積字為句、積句為章、積章為篇。諒哉。于茲水津氏光端者、志吾邦俗所玩之連歌。非吾吟、点綴十什之賦、重字疊句、十百之句。累累貫珠、日煉月煨、管管成于全豹之功用。其文郁郁、彬彬嶙峋。而后寄類於法眼昌億、潤削之手段有斧痕、評解以朱書之。自己傍布異鄉之口吏詩文、吾邦之記事詠歌、提撕筆耒、耕文園、釣餌竿鉤、漁學海。頗摘於的拋二分校矣哉。有時光端、二二条拳請問余、居我語汝、浩浩洗洗、渺渺更無涯。枚舉往往不可見。五車之駁輓、可難窮。咨嗟嘆閣筆。若干著見、好語話也。光端俛首拍手諾唯。余目擊此黃卷曰、是斯之詞藻、天下之壯觀、匪老鴉之鳴、為嬌鶯之聲。匪尺鷃之翺、有大鵬之翔。清絕粲麗、上林花、玄圃玉、允執其中。新題名字、曰花玉集。時宝永甲申年之秋於東都一跋語。

○題有馬

同

二月中旬發防州 撰津有馬飯休攸 晨明桜樹花開日 富士山峰雲  
「德山雜吟」一解說と翻刻一

霧丘 鼓澤応和鳴自得 温泉涌出激人憂 吟筈此地初來客  
請問村翁苦軋頭

○新刊塩鉄論序

同

予嘗聞、京師有伊藤仁齋者。其為人、温良篤實、碩學蓋世。其人已去、更無其儔。所謂君子哉。若人者而実學者之師法、斯人之大宝也。予思慕者久之、天不假良媒、不得接芝眉以承其馨教。今也易、賢、悵焉何如。家人長沼玄珍、遊其門有年矣。頃日録其行狀來。閱其事、益愜所聞。且不積塩鉄論、云有益於治道。余竊劉覽、美服其言。夫塩鉄之利所、以佐百姓之急、而此書亦詳述所、以拯百姓之急之術。舉而措之、則何職不修哉。吾嘉仁齋之志、囑嫡息長胤、校訂加點、欲使四方誦者之過、目易解也。遂命劉氏寿梓、託仁齋之志於不窮。庶幾与吾同好者、体仁齋之志矣。宝永四年丁亥秋日。

○戲詠俳優兒一并序

無名氏

一日盟歌之後、官暇有間。命敷牀張宴、招俳優之兒。欲戲樂遊。饗具陳陸海萬錢之差饌、曾不下筋、等間顧盼。予思爾等居家、則雖蔬食糲飯、獲之、攫之而啖、饜臍腹。今於此席、碟、吻、唾、鼓、喉而忍。為人術、艷質、非自然之情。構奪諸人財貨之媒、徒飲數行之酒。以嘉肴、則或鈕之、或掌之、少許噉其端、而捨膳碗矣。嗚呼是耶非耶。逃乎冥報、其心那何。殺滅叱叱。傍者聽而這個青紫植生世之餓鬼。餓鬼漫綴小律、嗚咲。

延見俳優二兒 坐辺羞饌万錢差 欲餐之者不為噉 軟語薄情 占艶姿

右件之詩、或以二二之言語、余、以是詩字於紙田、謂有綴詩

并序種。否否乎。非余心根。再三掉頭峻拒不聽。竟刈荒田之券。而勸吟筆之掣於紙田。云爾。宝永秋日。

○廣林義端題河舫芳韻長稻玄珍 同

連床數日坂城辺 疊疊貫珠說話鮮 投我一篇伝我主 數回展玩短春天

○同并序 長沼玄珍

洛陽東厓子与林義端俱來、見吾主於難波之旅館。一日同觀河舫。義端賦一詩而贈予、以謝其意。欲呈予之主人、而客中繁冗不得其間。行行到桑名、自是棹舟而遡佐屋川。舟中出詩而呈主人。主人稱其絕勝。或代予和其詩。既而主人命予賡其韻。詩成而舟著岸。是亦遭旅況之一助也。書以贈焉。

遠隨述職武江辺 傾蓋難波意思鮮 三月中旬分手後 見花遙想洛陽天

○題有馬瑠璃閣 同

瑠璃閣下閨閣撲 人集邦畿与海陬 兵庫浦遙魚上市 丹波路嶮馬経丘 七千神護大三界 一二湯冠六十州 不羨開元天子幸 兩皇嘗見翠華留

○命梁塵号説 同

歌曲之來久矣。本國古者有唐高麗日本三部、而後有權馬樂、有猿樂謡。民間有舞、有平家。諸州各有土俗風謡、近世又有淨瑠璃者。其為詞也、上自王侯大人之義忠士貞女之節、以至輕薄殘毒之醜匹夫匹婦之諒、口頭之語演其文辭、声音之變換其形情。所以三尺童子、皆能了了于心、便便于口。聞者或喜或驚、或笑或惡。人間情態世路艱辛莫不有焉。元人琵琶西廂記無以加焉。雖然非用

志不分声之出自然而清亮者、則不能擅其場矣。蓋天滿屋九兵衛者其人也。曼声曼舞上穿雲衢、細韻輕聲珠玉走盤。一聞其音者、不覺抃掌前席也。劉向別錄曰、魯人虞公善歌、發声動梁塵。梁簡文帝詠梁塵曰、定為歌声起、非闕扇風。於乎感人則易、感物則難。而人感後物感焉。吾子之動梁塵也、可計日而俟也。今我主命号曰梁塵。秦青之歌、鄒衍之律古之精于其技者、而其感也妙矣。故至今伝之。吾子勛焉。

○馬場桜花 桂方直

高梢參彼蒼 大可蔽牛羊 只不行庖地 每為馳馬場 秦雲凝倚疊 蜀浪激飛揚 吹滿春風面 著人韓寿香

○般若山掃路橋上見螢 同

爛竹爾前生 仮呼爛耀名 流時星有翼 発処炮無声 好雨欣宵暗 惡風厭曉明 杖探橋版去 秉燭導吾行

○詣金沙山觀音大士 洞春大機

金沙山在徳山治之正東

峰号金沙 禅刹古 幾人日夜此躋攀 路通河水 版橋畔 門聳煙林 竹樹辺 先聳綠泉 趨谷口 静凝丹府 拜慈顏 嘿祈偏以威神力 守護君齡堅似山

○般若山歳首口号 同

般若山洞春禪寺在徳山治之東南 鳥藤三頓向誰輕 朝打蝶兮暮打鶯 吾有往來請問客 使入先喫教茎青

○松間楓 元次主君賜題 福間隆廉

松樹亭亭楓爛爛 兩株交孕幾經年 戴霜青蓋擎庭上 織露紅



綽號殿前

○雪中梅元次之題

同

檻外幽花侵雪霰 清香玉色古今同 高標雖似程明道 未<sub>レ</sub>在春風和氣中

○画竹贊

鳥山輔寬

兩箇琅玕清且秀 不<sub>レ</sub>須千畝更扶疎 素練洒<sub>レ</sub>墨縱橫掃 綠葉籠煙向背舒 躍<sub>レ</sub>山玉龍相並立 招<sub>レ</sub>來丹鳳定巢居 風前宮徵聽雖<sub>レ</sub>欠塵外容姿看有<sub>レ</sub>余 蕭老精工惟足敵 僮翁健筆果何如 壁間对坐忘言久 只覺襟懷亦致<sub>レ</sub>虛

○次夏夜池亭坐月韻

同

池亭夜坐不堪清 湧<sub>レ</sub>出金波上<sub>レ</sub>砌明 更有<sub>レ</sub>芙蓉照<sub>レ</sub>紅艷 粧<sub>レ</sub>君酒思与<sub>レ</sub>詩情

○同

鳥山輔門

露洗<sub>レ</sub>銀河夜色清 人家隔<sub>レ</sub>竹一燈明 乘<sub>レ</sub>涼時倚<sub>レ</sub>西窓坐 蛩語殷勤似<sub>レ</sub>有情

○画竹贊

北村可昌

防之德山侯世家華胄而篤好<sub>レ</sub>文学 清操雅趣高出<sub>レ</sub>乎一世 而遠同<sub>レ</sub>古人 時寓<sub>レ</sub>懷於画 猷以為<sub>レ</sub>樂 命<sub>レ</sub>余題<sub>レ</sub>墨竹

德不<sub>レ</sub>孤立 双竿有<sub>レ</sub>鄰 非<sub>レ</sub>渭川種 追<sub>レ</sub>首陽人 雨洗瀟瀟 月照精神 艷奪<sub>レ</sub>桃李 節<sub>レ</sub>比<sub>レ</sub>松椿 四時濃翠 千古惟新

宝永丁亥之秋

○題<sub>レ</sub>画菊

伊藤維棧

心<sub>レ</sub>德山毛利侯元次之題 画<sub>レ</sub>峰巒台榭 則思<sub>レ</sub>登臨之樂 画<sub>レ</sub>花竹禽鳥 則促<sub>レ</sub>歡娛之情 給事

「德山雜吟」一解説と翻刻一

之所闕也大矣。而花之可<sub>レ</sub>翫者多矣。殿<sub>レ</sub>聚芳而獨能呈<sub>レ</sub>其操者其唯菊乎。古人云。初節易<sub>レ</sub>保。晚節難<sub>レ</sub>保者。我於<sub>レ</sub>斯花<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>之矣。夫善<sub>レ</sub>画者画<sub>レ</sub>其意。而不<sub>レ</sub>画<sub>レ</sub>其形。觀者亦取<sub>レ</sub>其意。可<sub>レ</sub>矣。奚唯<sub>レ</sub>以其形<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>。

○蝸牛花瓶銘

宇都宮由的

元次侯之茶店、有<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>枯藤<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>造之花瓶。形容非<sub>レ</sub>尋常之器、名曰<sub>レ</sub>蝸牛。其纒縮有<sub>レ</sub>似<sub>レ</sub>蝸牛之田殼、及見<sub>レ</sub>微角<sub>レ</sub>者。相伝、紀州熊野山之物也。侯得<sub>レ</sub>之、鍾愛越<sub>レ</sub>于他之琉璃金玉等之軍持也。命野翁作<sub>レ</sub>銘。不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>辭。於是乎銘。銘曰。

誰紀州藤 寄<sub>レ</sub>此窓裏 昔<sub>レ</sub>一春觀 今<sub>レ</sub>四時美 論<sub>レ</sub>彫瓶功 于<sub>レ</sub>花瓶徒 名<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>蝸牛 形模相似 升高近<sub>レ</sub>壁 終無<sub>レ</sub>枯矣 宝永乙酉歲宇遜菴的行年七十三書

○蝸牛花瓶記

長沼玄珍

瓶高八寸三分、口囲八寸一分。口徑二寸二分、口横徑二寸七分。纒結囲一尺五寸五分、纒結徑四寸八分。埤底囲八寸五分、埤底徑二寸五分。埤底横徑二寸七分。自<sub>レ</sub>口至<sub>レ</sub>纒結、左<sub>レ</sub>三寸右<sub>レ</sub>三寸五分。自<sub>レ</sub>底至<sub>レ</sub>纒結、左<sub>レ</sub>一寸九分。此間有<sub>レ</sub>小枝、長九分右<sub>レ</sub>一寸三分。其色朱紫漆<sub>レ</sub>其口。斜理蠶蠶不<sub>レ</sub>野不<sub>レ</sub>花。安<sub>レ</sub>几上而雅繫<sub>レ</sub>壁間、而朴實可<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>文房之奇觀也。仍記<sub>レ</sub>之。

宝永己丑仲夏日

蝸牛花瓶正面圖(略)

○遊<sub>レ</sub>八幡遠石別宮<sub>レ</sub>玩<sub>レ</sub>月

林三折

心帝城樓西又東 前程橋上往還恩 流清漣下蓼花水 氣爽嶺頭松樹風 寺隱北山幽邃際 船掃南海遠望中 玉階夜色明如昼 疑是人

間道二月宮

○題是光上人市隱

平生志却是非關 入市無為豈入山 万事不求心自足 誰知這箇老僧間

同

○早梅

水津寿全

百卉前頭占一陽 矮籬竹外漏清香 霜辛雪苦未全免 学得徐妃半面粧

○中秋玩月詩并序

同

月之為物也、四時可變。風収雲散清朗皎潔、一無礙則何時不變哉。而自古特以此夕為最、何也。意者、清光之異於他時歟。將人心之偏歟。歐陽詹曰、秋之於時、後夏先冬。八月之於秋、季始孟終。十五之於夜、又月之中也。稽諸天道、考諸月數、則蟾魄圓。由是觀之、不但人心之偏、月色亦與常時不同耳。不可不賞也。今年中秋、與諸友共玩月於林氏之堂。時万里無雲、長天如洗。夷希有之奇觀也。諸友各捨敬、或拋胡床於半庭、或曲肱而枕之。一醉一吟、知賞月而不知更之深。可謂追武昌之雅興、統牛渚之清談矣。予不揣固陋、賦蕪詞一篇、以乞坐賢之斧削。非敢謂為詩。聊役吟魂也已。

十分团影十分明 四辟六通得快晴 何待史官垂竹帛 一輪千古自高名

○淀川にてよめる

元次

さゝ波や志賀にはあらぬ淀川の流すゝしき夏の夕くれ

○早春水

きのふまでむすぶ水もはる風に今朝打解る瀧の白糸

古志氏 次昌

○田家秋興

消残る夕の霧や遠山田の菴に立る煙なるらむ

同

○初霜

草の葉にをく白露もいつよりかむすひかへたる今朝の初霜

松野氏 次高

○寄河恋

せきかぬるおもひはいつか山川の流れて絶ぬ袖のなみたは

同

○瀧辺花

桜咲峰よりおつる瀧つせの浪の花さへにほふ春風

常治 備前氏

○菊送多秋

いく年の秋をかかねて紅に匂ふか上の菊のしら露

同

○紅花待霜

紅葉も白きを後の色とてや千入か上に霜は待らむ

水津氏 光端

○富士風

煙のみ空になひきて雲はみなはらひはてたる富士の根風

同

○曉露

草枕起ゆくあとは有明の月ひとりこそ露にやとらめ

大野氏 直信

○寄橋恋

身はかくて埋るゝ谷の岩橋のいはても人を恋やわたらん

同

覽海軒詩并連歌

○漫興

磯辺好是矢二双眸 覽富上冬借楽遊 煮し海白煙瀧し沙業 漁舟拳し網有し魚不

徳山愚人次

磯辺 詩格十二漁父詞方秋 好是此二字詩格十三首出鋪繡改

矢 正字通陳也大雅卷阿章矢 雙眸韻瑞連目賦氣之神 覽富 韻瑞觀

上冬 初冬十月之別名月令広義類書纂要 借樂 孟子梁惠王上古 遊説

苑 齊景而樂之遊遊 煮海 文選此二字出淮南 白煙 白煙連海成一

陸明府 崔峒 漉沙 張融海賦漉沙構 業上繫辭富有 漁舟 韻瑞

紅葉近淮村 白熬 波出素 業之謂大業 漁舟 韻瑞

張和志詞 楓葉落荻花乾醉宿漁舟不 拳網 東坡後赤壁賦今者

杜五言 屏胡詩村鼓時時急漁舟箇箇懸 薄暮拳網得魚

有魚 杜甫詩隔屋險西 未定 不之辭

宝永六己丑十月十八日 松岡玄亨

〇題 覽海軒 枉駕臻民屋 賜名覽海軒 白煙朝暮業 人謂是豊村

〇同 吉村通菴 贅石聚砂工此壘 侍從路出似郊塵 宮洲突起新亭面 江口經

管茅屋連 海日輝輝魚網曬 浦煙袅裊水塩煎 風雖凜冽別詩興

農業無勞十月天 長沼玄珍

〇癸句 十月漁場時有隙 江南好景駐公車 海瀨縦煮漢文治 境内太榮

崎氏家 女汲男般潮汐用 君和臣案酌醇嘉 徒勞人力河原院 試

比勝遊千里差 面白や広き斥の塩のしも 徳山

面白や広き斥の塩のしも 徳山

塩竈の煙は霞む小春かな 次昌

塩かまのけふりは雲か村時雨 次高

霜の後磯辺の松の緑かな 政治

塩かまや煙立たつ松の霜 玄亭

海山を語るにかれぬ言葉哉 宗親

積塩や爰にたとへは不尽の雪 光端

宝永乙丑十月中の八日、周防の方輿下松といふ所磯辺の何某か

塩焼浜にあらたに亭を営む、君其亭に御座て遊覧あり、此浜は

誠天鍾秀美于茲、景を発句にもしたまふ、謂る広き斥は書經

禹貢海浜斥斥云、厥宜塩絺と又塩の霜と置るは奇書張融海賦に

積雪中春飛霜暑路と書たるとなん、また面白やの五文字は

古語捨遣に天神入石窟云、当此時上天初晴衆俱相見面皆明

白と見えたととなり、近侍の人々にしほかまといふ假名を句こ

との頭に置、末にては塩かまのけいと句の上にならへて哥仙の

数につくれと、仰ことありてつくるものならし

面白や広き斥の塩の霜 元次

しま門の月の定る真砂地 光端

星の影しるへに小舟さし寄て 次昌

水津氏 古志氏 清次氏 宗親 次高 利貞 長常 増野氏 政治

まち／＼の苗や生る小田の原

しつか住居の富し家々

ほかよりも豊けき国の政

かしこきをこそ求め得ぬれ

まさしきは門占士の心にて

した待君そ月に来ませる

ほの暮て露かゝるらし蜘蛛の糸

かいやる琴や霧にしめらむ

まいの手は入あやになる花の陰

しはしとてくむ春の盃

ほと遠く越く旅よ長閑かれ

から国までの舟よそひせり

まことある心に解しいはた帯

しけ／＼火をたつる神々

ほとけをはあかむる人も稀ならし

かねの御嶽の道のはるけき

まなく散る雪を分行吉野山

しくれはさそな故郷の空

ほし佗て洗ひし衣打もきす

かりね夜長き管こもの上

まくらをしかはさぬ思月もしれ

しのふさはりそいたく身に入

はふる其犬の声猶かしかまし

かすは限らす螢とふ暮

神村氏

朝方

光井氏

利高

河合氏

宗重

桂氏

澄治

大野氏

直般

執筆

九

十

一

二

一

二

一

二

またいつかあふみ遊ひの時ならん

のちも名に立移す塩竈

けふ花の光霞まぬ浦の波

いそ辺の松の色若緑

○孟冬即事

霜葉嶺班曬錦時 満庭佳色上双眉 貞松自有千年影 寂寞講

堂法起基

千年ふる軒端の松をく霜のひかりさしそふ影そ木高き

次是光和尚之韻

相遇下松坤月時 笑談諄諄接芝眉 儘教晴好江南雨 斯是光風裁

句基

返し

幾歳の寒さを経へきこの松の根さしも深く色にあらはる

是光和尚者、徳山市中無量教寺前任吉水流之僧也。年過耳順、素

有篤実之声。特召于下松周慶寺見之。因命上詩歌、君侯即

和之。

○詠水滴并序

今茲得釣命之國、五月赴西厨之食館。船馱石尤風、繫船于備

州牛窓。言我侍從之者曰、聽此処有河浜、往而求之哉。林次章

唯諾、奄棹舟到岸登。少選微獲而帰。視其陶器、摸牛形、盛水

滴。腹空容半合。予取之、置碗頭而平常誼愛撫慰、助説書。戲

醜藉一絶、四句裁於牛之字。嗚呼当年巢父不飲牛。孟子有

牽牛而過堂下者。莊子未嘗見全牛。丙吉喘牛、田單火牛。有

金牛石牛黄牛白牛、又有黑牡丹花蹄牛。樹精入根經千歲成

青牛。因牛口実為名、不暇勝計。所愛之牛、亦而瘦休、車耕之勞、屈脚伏、謂無心矣、其像和其処、同亦奇事也。

可<sub>レ</sub>愛<sub>レ</sub>几頭牛屈脚 此形齊<sub>レ</sub>処在牛窓 牛之故事古今幾 日日赤牛向<sub>レ</sub>視江

○題<sub>二</sub>紅白牡丹圖<sub>一</sub>

蓮仁老將 松堂宗植

牡丹采画圖中 四序花開奪<sub>二</sub>化工<sub>一</sub> 清麗併看冰玉色 鮮妍絕勝勝脂紅 姚黃魏紫粧猶薄 俗李凡桃越不同 何情韓郎費<sub>二</sub>神術<sub>一</sub> 主人手裏恣<sub>二</sub>春風<sub>一</sub>

○題<sub>二</sub>石竹圖<sub>一</sub>

勘解由小路 散位藤韶光

尖尖細細綠叢叢 濃淡相交白又紅 不是美人裙上見 生綃一幅冠<sub>二</sub>天工<sub>一</sub>

○題<sub>二</sub>梅花圖<sub>一</sub>

伏原少將 宣通

写出天然漏<sub>二</sub>化工<sub>一</sub> 年年相約伴<sub>二</sub>春風<sub>一</sub> 清香不<sub>レ</sub>動精神在 玉色粧成<sub>二</sub>圖画<sub>一</sub>中

右三詩者元次君家藏画圖之贊也

○題<sub>二</sub>枯葦翡翠圖<sub>一</sub> 應<sub>二</sub>德山侯之命<sub>一</sub>

伊藤長胤

四時之興、莫<sub>レ</sub>逸<sub>二</sub>於秋<sub>一</sub>也。而秋興之感<sub>レ</sub>人、常在<sub>二</sub>於清泉白石之間<sub>一</sub>。風情蕭索、奔流難<sub>レ</sub>追。此少陵氏之所<sub>レ</sub>以感<sub>レ</sub>瞿塘曲江之秋<sub>一</sub>也。豈唯嗟年光之易<sub>レ</sub>邁、亦以及<sub>レ</sub>時立<sub>二</sub>事也<sub>一</sub>。數<sub>レ</sub>葦枯葦、一隻翠鳥、忽被<sub>二</sub>顧<sub>レ</sub>頭拈出<sub>一</sub>、掃<sub>二</sub>破<sub>レ</sub>半幅<sub>二</sub>鵝溪<sub>一</sub>。倚<sub>レ</sub>圖想<sub>レ</sub>境、令人有<sub>二</sub>若響<sub>レ</sub>聞意思<sub>一</sub>。

○河舫住古丸記

林義端

宝永戊子之春、德山元次侯、随<sub>二</sub>例東觀、信<sub>二</sub>宿大坂之邸、邸前繫<sub>二</sub>一樓船<sub>一</sub>。此乃大坂到<sub>二</sub>于伏見之所<sub>レ</sub>乘也。僕蒙<sub>レ</sub>命得<sub>二</sub>登覽<sub>一</sub>焉。上<sub>レ</sub>登<sub>二</sub>華樓<sub>一</sub>、以遠望<sub>二</sub>山、下開<sub>二</sub>綺窓<sub>一</sub>、而近<sub>レ</sub>瞰<sub>二</sub>江。層檐玉題、重門金鋪、光耀映<sub>レ</sub>日、灼

「德山雜吟」一解説と翻刻一

燦奪<sub>レ</sub>目。其制度壯麗不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>以言形容矣。僕歸<sub>レ</sub>京之後、每逢<sub>レ</sub>人則必誇以為<sub>二</sub>一奇觀<sub>一</sub>。或問<sub>レ</sub>名<sub>二</sub>住吉之意<sub>一</sub>、僕不<sub>レ</sub>能卒答。退而按<sub>二</sub>旧記<sub>一</sub>云、昔者神功皇后征<sub>二</sub>三韓<sub>一</sub>時、表筒男中筒男底筒男三神、託<sub>二</sub>于皇后<sub>一</sub>而循<sub>二</sub>行四方<sub>一</sub>、遂到<sub>二</sub>摂州<sub>一</sub>、宣言曰、真住吉真住吉之國也。因<sub>レ</sub>鎮<sub>二</sub>坐其地<sub>一</sub>、名曰<sub>二</sub>住吉<sub>一</sub>。古事紀日本紀、共有<sub>二</sub>我魂坐<sub>二</sub>于船上之言<sub>一</sub>。故自<sub>レ</sub>古稱<sub>二</sub>護船之神<sub>一</sub>也。蓋名<sub>レ</sub>以此意耶。竊<sub>レ</sub>以謂、侯夙奉<sub>二</sub>天道<sub>一</sub>、以敬<sub>レ</sub>其德、仰<sub>二</sub>聖賢<sub>一</sub>、以勵<sub>レ</sub>其行。是故政治清明、民物富庶、亦非<sub>レ</sub>他邦之所<sub>レ</sub>能及也。書曰、至治馨香感<sub>二</sub>于神明<sub>一</sub>、黍稷非馨明德惟馨。於戲若<sub>レ</sub>侯之盛德至誠、則天神地祇亦將<sub>レ</sub>感格矣。豈獨<sub>レ</sub>住吉之靈焉已哉。

○贊

德山愚人

故不<sub>レ</sub>貴<sub>二</sub>賤紳<sub>一</sub>、以有<sub>レ</sub>德為<sub>レ</sub>貴也。蓋隱君子也。茅舍南簷、花木草株、清雅幽趣。居移<sub>レ</sub>氣養敦<sub>レ</sub>素。寢興以時、載巾褰衣、食不<sub>レ</sub>好<sub>レ</sub>肥甘。常啜<sub>レ</sub>茶、焚<sub>レ</sub>香、不<sub>レ</sub>近<sub>二</sub>酒色<sub>一</sub>。交<sub>レ</sub>人不<sub>レ</sub>立<sub>二</sub>涯幅<sub>一</sub>、間情適<sub>レ</sub>志、消<sub>レ</sub>遣世慮。抱<sub>レ</sub>膝拳<sub>レ</sub>目、低<sub>レ</sub>頭憶斷。夫人在<sub>二</sub>世間<sub>一</sub>、役<sub>二</sub>夜塵網<sub>一</sub>、徒躍躍紛紛。白眼看<sub>レ</sub>他世上人、噫天下思<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>同心人<sub>一</sub>耳。陰陽之調化、雪月花之時、昼賞<sub>レ</sub>其景、繼<sub>レ</sub>以下<sub>レ</sub>夜。隱<sub>レ</sub>凡執<sub>レ</sub>卷披閱不<sub>レ</sub>倦。深潛玩索、丹黃評論、有<sub>二</sub>至理義德<sub>一</sub>。座右說<sub>レ</sub>得奇書、格言故事、以<sub>二</sub>未<sub>レ</sub>識未聞<sub>一</sub>、広<sub>レ</sub>其心胸。事物皆給、曉<sub>レ</sub>慰快事、大天下莫<sub>レ</sub>能載<sub>レ</sub>焉、小天下莫<sub>レ</sub>能破<sub>レ</sub>焉。從容中<sub>レ</sub>道、言順<sub>レ</sub>行、行順<sub>レ</sub>言、乃勤<sub>レ</sub>乃儉、守而克昌、恍<sub>レ</sub>對<sub>二</sub>聖賢面<sub>一</sub>、談<sub>二</sub>千古<sub>一</sub>有<sub>レ</sub>益、贏得<sub>レ</sub>超<sub>二</sub>凡俗<sub>一</sub>、青眼吾為<sub>レ</sub>友生。豈何欲樂<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>勝乎哉。

○說<sub>二</sub>塩鉄論<sub>一</sub>

林義端

住歲古学先生唱<sub>二</sub>学京師<sub>一</sub>、導<sub>レ</sub>其徒弟<sub>二</sub>以明<sub>レ</sub>經業<sub>一</sub>、達<sub>二</sub>治体<sub>一</sub>、而得<sub>二</sub>古聖人之道<sub>一</sub>。嘗曰、桓寬塩鉄論、說<sub>二</sub>仁義<sub>一</sub>、述<sub>二</sub>王道<sub>一</sub>。自契<sub>二</sub>於鄒軻氏之

旨、有志經濟者、不可不誦焉。德山元次侯資稟甚高、而務學甚篤。恤民濟衆之心、常存而不怠。私淑先生之道、而深有感于。乃命捐資印行茲書、以繼先生之志。其意惠後學亦大矣哉。有客難之者曰、茲書專說龍壚鐵酒權、戒與民爭利、其論固當矣。然而不適時機、闕於事情。其不可行也、必矣。僕曰、嗚呼此其何言。謂之茲書弁析精嚴文辭簡奧、初學之徒或不可解、則可也。謂之不適時機、必不可行、則謬矣。凡不適時機、無甚於六經四書焉。大學曰、德者本也、財者末也。又曰、與其有聚斂之臣、寧有盜臣。此姑拳一二耳。其餘聖賢之教、皆是莫不崇仁義而退財利也。亦將謂六經四書不可行、可乎。大抵後世之人誦書講學、如困甚闕賭。徒供一時之消遣而已。豈有真能得諸心、而行諸躬者哉。世孰不誦大學者。而其警誠激功、若德本財末寧有盜臣章、豈不為之悚動感悟。而退顧其平生、則未有喜聚斂者甲。何其書與我相背馳之甚耶。昔秦皇暴虐固極矣。然其於書、猶似有所顧愧。其心以為、世有書與儒、則不可不遵其教。而遵其教、則有害於我所欲也。遂附之焚坑。蓋是猶知書之不可不遵矣。後世之人、利害是非綫置之度外、無所復顧愧。特於茲書問之適時機、與否乎。乃由主客之難、遂論後學之弊、益感下侯之深志經濟、托茲書於不朽、使先生之教不泯沒于世焉。但所懼者、狂奴故態喋喋至此、何免僭躒之罪。

宝永庚寅仲秋下流

### 題德山雜吟後

德山元次侯海西大姓、世鎮雄藩。銳情備術、不好紛華、惟經史自娛。有河間王之癖、而過致天下奇秘。蓋天資穎悟、濟之以博洽。故其發于文字、雅健而有奇氣、兼善筆法。龍翔虎臥之妙、闕國無出其右者也。以業典籍、誤許謁見。過差之寵、無任喜懼。往歲蒙命、鐫德山名勝卷。爾後敢不自量、私披其遺文、輯茲編、以擬統集。自侯及其府之文人詞士、至于京師諸名流、長篇短韻、攢華簇錦。固是一時之偉觀也。此原出于侯好文之餘、展軫蔓延、遂成三二書。奇文傑作、繼此有得者、又將以梓之公于世。庶幾無滄海遺珠之嘆。近世牧藩之主、鋪張本朝之文教者、世常稱故水戶西山源公。其著書述言、所以潤色太平者、郁郁乎盛矣哉。西山源公之後、繼其芳躅舍侯、而其誰哉。

宝永庚寅仲春日

京師書房林義端九成謹題于文會堂

追記 翻刻に際し快諾を与えられた宮内庁書陵部、御世話いただいた

た林左馬衛先生に深く御礼申し上げます。